盲目と閃光
視覚の病としてのトラウマの原点には爆発がある

下河辺　美知子

視覚的画像の襲撃

「外傷性神経症」(traumatic neurosis) とフロイトが名付けた症状は、時代とともにその存在を認知されたり、また忘却されたりということを繰り返してきた。[1] 現在使われているいわゆるPTSD（post-traumatic stress disorder 心的外傷後ストレス障害 ）という診断名は、アメリカ精神医学会編『精神疾患の診断・統計マニュアル第三版』(通称*ＤＳＭ-III* 1980)に初めて登録された。ヴェトナム帰還兵たちの中に外傷性神経症と思われるケースが頻出したため、診断名として認知せざるを得なくなったという社会的事情が、PTSDを*ＤＳＭ-III*という診断マニュアルに登場させることになった。つまり、それまでは不可視のものとして扱われていた精神的症状が、歴史の中に可視化された結果、診断名を与えられたのである。「自分たちの戦争体験を聞いてほしい」という帰還兵たちの声がアメリの歴史上初めて取り上げられ、精神医療の中で政治的な位置を与えられたのだ。心の病として病名を付加された結果、患者とその症状とは可視化され、人々の目に映ることになった。

*ＤＳＭ-III*に記載されたPTSDの診断基準はＡ～Ｆの六つの軸に分かれており、各々の項目の中で、症状として当てはまるものが「五つのうち二つ」とか「一つまたはそれ以上」あればPTSDとして特定するという方式になっている。Ｂ軸で挙げられた症状はPTSDの症状として最もよく挙げられる部分であり、五つの項目からなっている。この五つのうちの一つ以上の症状があればPTSDと診断することになっているのだが、そこには、人の死などのトラウマ的出来事に直面した時の反応が並べられている。[2]　例えば、患者の心の中では、出来事が「心象（心に描かれるイメージ）(images)」「苦痛な夢(distressing dreams)」「幻覚(hallucinations)」などの刺激として患者を襲うとされている。PTSDの症状は（聴覚、嗅覚、触覚その他の）五感による記憶が心に凍結した形でおこるものであるが、Ｂ軸で使われている「心象」「夢」「幻覚」といった用語から見えてくるように、PTSDの症状の最も顕著なものは視覚的情報に

かかわるものだと言えるであろう。

そこで、その症状であるが、それは「フラッシュバック」と言われ、過去からやってくるものであり、しかも「反復的に(recurrent)」（１および２）「再び起こっているように(recurring)」（３）「再体験(reliving the experience)」（３）する。問題はその繰り返しの体験を本人が望んでいるか否かである。フロイトの「快感原則」から言えば、人間は快いものを再体験することを望むことになっている。しかし、望まないのに反復的に体験しようとする症状がある。快感原則にあてはまらないこの症候群の存在に気付いたとき、フロイトは快感原則の向こうにあるその奇妙な症状に注目し、「外傷性神経症」(traumatic neurosis)と名付けた。[3]　つまり、想起するのが苦痛であるにもかかわらず、「繰り返し」襲ってくる感覚、それは*ＤＳＭ-III*の用語でいえば「侵入的(intrusive) 」な刺激であり、フロイトの言葉で解釈すれば「刺激にたいする保護膜にできた裂け目(breach) から侵入して心の機能に生じた症状」[4]なのである。

トラウマの反応が視覚という器官を通してやってくるのだとすれば、今述べたような「反復的」「侵入的」襲来として我々を襲うのは、「見えすぎる苦しみ」であり、「見たくないものを無理やり見せられる苦痛」である。これを心の中に凍りついた何らかの記憶がもたらす作用として考えてみよう。あまりに明らかに鮮明によみがえる画像。しかし、光あふれる中に出現する画像を見るとき、見ている側の人間の視神経はかえって麻痺させられるのではないだろうか。見えすぎる情景、しかも、見ることを強要されて見ている情景の裏に別の真実があって、われわれは目がくらんで盲目になっているとしたら。そう考えるとき、盲目(blindness) という概念を再考する必要性が浮き上がってくる。

閃光と爆発

光の過剰によって見たくないものを見せられ、見えすぎることに苦しむ記憶が個人の心のトラウマ記憶であるとすれば、共同体の記憶である歴史にも同様の作用を見出すことが出来る。第一次世界大戦の勃発についてハンナ・アレントは次のように言っている。「破局が放った**鋭い閃光**にわれわれはまだ今日でも**目がくらんでいて**、事件の輪郭を見定めて描くことさえ容易ではな

い。」[5]（強調下河辺）1914年にヨーロッパで起こったことや、戦争に突入した契機や動機などを言葉で言い表そうとする試みは、閃光という激しい光に照らし出されるとき人の視覚神経をマヒさせて、われわれの理解力・推理力を無効とする。ここでは、歴史の中のトラウマ的出来事を表現するのにアレントが使ったさらなるメタファーに注目したい。

もしこの事件がこの一回の破局で完全に終わっていたら、おそらくはこれほど劇的な様相を示しはしなかっただろう。・・・最初の**爆発**は今日まで止むことなく続いている連鎖反応の歴史の合図のようなものだった。[6]

第一次世界大戦は修復不可能なほどにヨーロッパ諸国相互の礼節を**爆破して**しまったのだ。それは、他のどんな戦争もそれまで成しえなかったほど破壊であった。・・・全体主義政治がヨーロッパ文化の構造そのものを攻撃し、半ば破壊してしまう以前に、1914年の**爆発**とその結果としての過酷な混乱はヨーロッパの政治システムの表面をたたきつぶし、その隠された構造をはっきりと露わにしたのである。[7]

一つ目の引用は日本語版『全体主義の起源』第九章の冒頭のものであり、二つ目の引用は英語版*The Origins of Totalitarianism*のChapter Nine, “The Decline of the Nation-State and the End of the Rights of Man” の冒頭のものである。二つの版は内容においてかなりの違いがあるのでここでは別々に引用を挙げてみた。いずれにしても、アレントが「爆発」(explosion) というメタファーにこだわっていることがわかる。たとえば、英語版267頁 (34行) の中に、「爆発」に関する “explosion”と “explode”という語が四回も使われており、アレントは「この修辞的言い方(figure of speech)は正確ではないかもしれないが」と言って、「爆発」という用語をメタファーとして用いていることに読者の注意をむけている。

さて、問題は爆発を機におこったとされた変化の内容であるが、アレントは第一次大戦勃発の1914年8月4日以降のヨーロッパ社会の変化を細かく述べている。それは、インフレーション、失業、移民といった社会現象であり、どれも時間の経過の後に現れる現象である。にもかかわらず、アレントは瞬間的に起こる「爆発」という言葉でこの戦争のもたらしたものを語っている。

何か決定的な断絶または破壊が起こったことを直感的に感じ取って、アレントは「爆発」というメタファーを持ち出しているようである。

歴史の消去

歴史における「爆発」の意味を、字義通り、そして修辞的、という二通りの面から論じた批評家がいる。精神医学の概念であるトラウマを人文・社会科学の領域に持ち込み歴史認識の根源にせまる著作を発表しているキャシー・カルースである。今から二十年前、アメリカの精神分析の専門誌『アメリカン・イマーゴ』が、1991年第一号および第四号の二回にわたり「精神分析・文化・トラウマ」という特集を組んだ。そのとき、責任編集者にむかえられたのが、文学研究者カルースであった。この特集には近隣分野から領域を越えた考察が集められ、トラウマという概念が現代文化に衝撃を与える様子が明らかにされたが、とりわけ、歴史の言説への新たなるアプローチは、歴史という概念自体への揺さぶりを与え、もう一つの歴史の語り方の可能性へと我々を導いてきた。

カルースの最新の論文“Lying and History” はハンナ・アレント生誕百年を記念して出版されたアンソロジー*Thinking in Dark Times: Hannah Arendt and Ethics and Politics* (Fordham University Press, 2010) に収められている。[8]　アレントは国防総省秘密報告書（ペンタゴンペーパーズ）の発表にたいして「政治と嘘」(1967) という論文を書いている。国防総省秘密報告書（ペンタゴンペーパーズ）とは、ヴェトナム戦争の開始・遂行におけるアメリカ政府の嘘を明らかにした文書である。カルースはアレントの論文への応答として”Lying and History” を書き、その中で言語システムとしての政治がいかに嘘と共犯関係を作るものであるかを論じている。「事実を語ることは、その本質において嘘を語ることよりずっと政治性が低いものである」と指摘するカルースは、アレントの「イメージ作り」という概念についての議論をさらに進め、「嘘をつくことは、現実を覆い隠す行為（これは伝統的な欺瞞）であるだけでなく、すべてを包含する虚構で、現実をすっかり入れ替えてしまう行為である」[9]という認識を提示している。

アレントが第一次世界大戦勃発を「爆発」と表現したことについてのカルースの見方はこうである。爆発とは、「新しさをもたらすもの・・・時間の中に現れて未来を全滅させる亀裂」[10]である。そして、第一次世界大戦開始か

ら第二次世界大戦終結へという歴史の流れを爆発の連鎖ととらえたカルースは次のように言うのである。「その爆発の連鎖の中では、開始と終結とは等しく破壊的であって、歴史とは、先行する歴史を繰り返し抹消していくことで形成されていくように見える。」[11]　政府が目標を掲げ国民を動員しようとするとき、それが戦争であれ、災害被害への対処であれ、よしんば国家興隆のためであっても、そこには現実の隠蔽や、作られた現実のすり替えが仕組まれている。歴史の抹消の連鎖の中に置かれているとすれば、われわれは見ているつもりで盲目になっているのかもしれない。いや、むしろ、可視性を第一として与えられる情報の数々が、あまりに見えすぎるがゆえに、目つぶし的盲目状態にわれわれを陥れている危険はないのか。カルースの議論はここから嘘の問題へとつながっていく。

消去の痕跡と嘘

カルースは今から十一年前の2000年6月に来日し、帰国後すぐに日本の新聞に「心のツメ跡：ヴェトナム戦争後の米国」という記事をよせた。[12]「政治の裏切りが招いたトラウマ」「『盲目』の恐怖語る帰還兵」といった小見出しが付けられたその記事では、ヴェトナム帰還兵にPTSDが発症した理由を実戦の恐怖にだけ求めるのではなく、アメリカ政府が戦争の動機や展開を隠蔽してきた「裏切りの恐怖」にも求めるべきであると述べている。その上で、PTSDを兵士たち個人の精神疾患としてとらえるだけでなく、アメリカ国家の病としてとらえよと主張する。アメリカ人たちは、PTSDのフラッシュバックを通して「戦争の衝撃だけでなく、戦争にかかわる政治的裏切り」に対して盲目であったことを知るべきであり、ヴェトナム戦争へ突入する経緯についての政府の最高機密をすっぱぬいた国防総省秘密報告書（ペンタゴンペーパーズ）は、「『不可視の戦争』を『可視のものとした』行為であり・・・我々は（この文書によって）物が見えるようになった」と結ばれている。ここに本論のテーマである盲目の概念に通じるものを見出すことができるだろう。

われわれはアメリカの歴史の盲点の一部が明るみに出されたこの出来事からメッセージを受け取ることが出来る。それはトラウマという苦しい症状の中にあって、そこに一つの可能性、つまり、自らが盲目であること、裏切りを見通せないでいたことに気づく可能性を捕まえる希望である。もちろんそ

れは簡単なことではない。現代の嘘は、アレントの言う「イメージ」操作によって見えすぎるほどに見える形でわれわれに情報を送ってくるからだ。カルースは「現代の嘘の到来は歴史の消去の到来である」と言うのだが、その消去の中にはわずかながら残される痕跡がある。アレントのテクストにあった「爆弾」という言葉を、カルースは「自らの（部分的＝半分の）消去のプロセス自体を伝達する痕跡」と読み替えている。「歴史の消去は完全におこなわれるわけではなく、それは、半分だけ消去されて未来へ伝達され、そこでは、爆弾による暴力的な刷り込みの中に（爆弾に伴う科学技術の中に）消去はその痕跡を残している」のである。[13]

原子爆弾の閃光が蔽い隠すもの

再び現れた「爆発」のメタファー。カルースの想像力はここで原子爆弾という現実の爆弾へとうつっていく。人類初の大量殺戮兵器であり、日本に投下されたテクノロジーの終結物は、現実の爆弾の表象であると同時に、力を表象する「全能のイメージ」という比喩的な働きをも担っている。それ故に、とカルースは言う。「爆弾は――ちょうど現代の嘘がそうであるように――見えるものであると同時に見えない何かとして自分のイメージを作り上げているのである。」[14] 爆発時に放たれた「閃光」は原子爆弾が生み出す現実を――日本の悲惨な現実であれ、アメリカの勝利の輝きであれ――そのまばゆい光の洪水の中に浮き上がらせる。これほど可視性の高い画像はないほどに。しかし、一方で、カルースはその閃光が原爆投下の決定行為に不可視性を与えていることを指摘する。

> 原爆投下の決定は・・・原子爆弾のイメージの力によって蔽い隠され、そして消去される。・・・その投下を示す『きのこ雲』は原爆投下に一種の不可視性を与えたのである。(そしてさらには、意思決定行為のためでなく未来の戦争を付加しにするために用いられる用語となった。)原子爆弾投下における意思決定行為の消去――それは、イメージによって決定が消去されるプロセスである――は、新しい種類の事実の創造とみなすことができるであろう。[15]

盲目と閃光
視覚の病としてのトラウマの原点には爆発がある

爆弾の閃光によって我々は目をくらまされ、爆弾の力によって事実を吹き飛ばされるかもしれない。しかし消されたかもしれない歴史は、それでも抹消の形跡だけは残していく。「爆弾」という用語はカルースの議論では文字通りの意味を離れて、歴史を破壊する力として修辞的な意味を付加されて使われている。カルース論文の最後の小見出しは「目撃の可能性」であるが、このタイトルは「(歴史を消去すべく投下された) **爆弾**の持つ根源的自己抹消の歴史性を我々がかぎとる」(強調下河辺) ための予告をしたいという思いの表明である。原子爆弾の表象についての分析で、閃光やきのこ雲があまりに可視的であるゆえに、その暴力的破壊力が不可視になることをカルースは指摘するが、その上で、原爆投下の決定、ヴェトナム戦争遂行の過程など不可視にされていた暴力を目撃する可能性は、すべてを破壊しすべてが消し去られた後の「痕跡」に目をこらすところにかろうじて残っているとカルースは言う。歴史認識にもたらされる暴力に自分たちが盲目であることを、われわれはどのように引き受ければよいのであろうか。原子爆弾が歴史の抹消を表象しているというならば、全人類の存亡がかかっている核兵器とは、人類共通のメタ・トラウマの表象である。

光学的誘惑（オプティカルセダクション）

医学的に言うと、盲目とは視神経の損傷により網膜が光を感知・受容できない、あるいは、光学的情報を脳に伝達できない障害である。確かにオイディプス王は自らの目を突いて、視神経の機能を損傷させ視覚活動を停止した。しかし、彼が見ていなかったもの、見えなかったものとは、光と色の集積である画像ではなかったはずだ。彼の目に映った人や物と自分との関係を、彼は理解していなかったのだ。いや、フロイト的に言えば、無意識の欲望が理解を拒んでいたのである。英語のblind（ 形容詞 ）には「理解できない、しようとしない」という認知についての意味があるし、blind (他動詞) は「理性、判断力、良識を使えないようにする」という意味で使われることがある。

理解についての誤解。われわれはよく見えるものを見て、それを理解したと考える。しかし、光が過度にあたる光景には閃光による目くらましがあること、爆発によって何かが消去された可能性があることを知るべきである。しかし、そこでとどまっていてはならない。なぜなら、完璧なる抹消として

の「情報のホロコースト」の後に、わずかながら残る痕跡をかぎとって、消去という行為が行われた証拠をつかまえることが、歴史の存続のためにわれわれができる貢献であるからだ。Jacques Derridaが9.11という出来事について述べたインタヴューの言葉が今よみがえってくる。

> 出来事はやって来るものであり、そしてやって来ることにおいて、私を襲撃して驚かせに来るのであって、すなわち理解（カンプリヘンション）[包囲して捉えること、包含] を襲撃し宙吊りにするべくやって来るのです。つまり、出来事とはまず何よりも、私がそもそも理解=包含するのではないものなのです。さらに言えば、出来事とは何よりも、私が理解=包含しないという**こと**です。[16]

理解という言葉が否定され、理解しないということ自体が出来事であるという論旨の中には、常日頃、何かを目にしていながらそれを理解しないという盲目性が述べられている。理解への拒絶が理解という概念にたいする誤解を招いているのである。

可視化されてわれわれの網膜に画像がむすばれるとき、それにとびつきたくなる欲望。歴史は光に反応する心理的習性に導かれて紡がれてきた。それは、理解しやすさへの誘惑であり、孤立への恐怖の中にあって仲間と同じものを見ている安心感への誘惑でもある。可視化されたものが照明をあてられてくっきりと見えるときこそ、不可視にされているものが何らかの消去の痕跡をのこしていないかを心の目をこらして見るべきであろう。

2011年5月1日、オバマ大統領は「9.11同時多発テロの首謀者、ウサマ・ビンラーディンを殺害した」と発表した。2001年9月11日以来、アメリカは十年にわたって自分たちに向けられたとてつもない憎悪という謎を国家の中に沈殿させてきた。その謎に答えが与えられないまま過ごしてきた不安がこのニュースによって解消されたという安堵感が、歓喜にわきたつアメリカ国民たちの姿にあふれていた。理解不能であった「出来事」がオサマ・ビン＝ラディンという姿に可視化され、それを処理したことで盲目の部分に光線あてることが出来た。アメリカ国民はこう考えたいに違いない。しかし、その遺体は海に流されたというし、映像を公開することも政府は差し控えている。見えたはずのものは、人々の心の中に幻の映像を結んでいただけなのだろうか。視覚の病としてのトラウマは歴史の中に未だとどまっている。

盲目と閃光
視覚の病としてのトラウマの原点には爆発がある

---

[1] 「心的外傷の研究の歴史は奇妙である。ときどき健忘症にかかって忘れられてしまう時期がある。活発に研究がおこなわれる時期と忘却期とが後退して今日にいたっているのである。」Judith Herman, *Trauma and Recovery* (New York: Harper Collins Publishers, Inc., 1992), 7. 『心的外傷と回復』（中井久夫訳 みすず書房 1996 年）3 頁

[2] *DSM-III* では、309.81 に PTSD という診断名が登録されている。B 軸の記載は以下の通りである。

B. The traumatic event is persistently *re*experienced in one (or more) of the following ways:

(1) recurrent and intrusive distressing recollections of the event, including *images*, thoughts, or perceptions.

(2) recurrent *distressing dreams* of the event.

(3) acting or feeling as if the traumatic event were recurring (includes a sense of reliving the experience, *illusions, hallucinations, and dissociative flashback episode*・・・)

(4) intense psychological distress at exposure to internal or external cues that *symbolize or resemble an aspect of the traumatic event*

(5) physiological reactivity on exposure to internal or external cues that symbolize or resemble an aspect of the traumatic event.

Diagnostic and Statistical Mannual of Mental Disorders (The Third Edition, *DSM-III*) American Psychiatric Association, 1980. (underlines & italics mine)

[3] Sigmund Freud, *Beyond the Pleasure Principle.,*tr. James Strachey, New York・London; Norton & Company 1961., 10.

[4] Ibid., 35.

[5] ハンナ・アレント『全体主義の起源』２　第五章「国民国家の没落と人権の終焉」（大島道義、大島かおり訳　みすず書房）235 頁

[6] アレント、235 頁

[7] Hannah Arendt, *The Origin of Totalitarianism* (New York: Harcourt Brace, 1976), 267.

[8] ニューヨーク州にあるバード大学(Bard College) でハンナ・アレント生誕百年を記念する大会が開かれた。バード大学は、Hannah Arendt Center for Ethical and Political Thinkingの所在地としてアレント研究の拠点の一つとなっている。大会のテーマは「暗い時代に思考すること:ハンナ･アレントの遺したもの」(Thinking in Dark Times: The Legacy of Hannah Arendt)であり､アレントが20世紀の思想家たちについて述べた *Men in Dark Times*（1968）を意識して設定されていることは明らかである。この大会には、専門領域を超えて横断しあうことを目指して、知識人、芸術家、ジャーナリスト、学者などが招待された。アンソロジーの序文によれば、より広い領域にアレント研究を開いたことで､「これまでのアレント研究の中で行われてきた解釈や学問成果の中で見過ごされてきた可能性のある政治的・倫理的思考への情熱をこめた関わり方が見えてきた」とのことである。大会終了後、発表者たちが自分の発表に加筆して寄稿した論文を集めたのが*Thinking in Dark Times : Hannah Arendt on Ethics*

and Politics. Roger Berkowitz, Jeffrey Kats, Thomas Keenan eds. New York: Fordham University Press, 2010. である。

[9] “ Lying and History,” in *Thinking in Dark Times*, 79-92. 「嘘と歴史」下河辺美知子訳『みすず』（上）2011 年 5 月号（14-27）、（下）6 月号（2-11）

[10] Ibid., 90.

[11] Ibid., 90.

[12] 二〇〇〇年八月七日付『東京新聞』夕刊

[13] *Thinking in Dark Times*, 90.

[14] Ibid., 89.

[15] Ibid., 89.

[16] Jacques Derrida, *Philosophy in a Time of Terror.* Chicago: The University of Chicago Press, 2003. (ハーバーマス、デリダ、ボッラドリ『テロルの時代と哲学の使命』藤本一勇他訳　岩波書店　2004) 134 頁